



TITLE:

大学教育の再構築-専門職化と教養
教育再編の狭間で-(<第13回大学教
育研究フォーラム シンポジウム
>挨拶)

AUTHOR(S):

尾池, 和夫

CITATION:

尾池, 和夫. 大学教育の再構築-専門職化と教養教育再編の狭間で-(<第13回大学教育研究フォーラム シンポジウム>挨拶). 京都大学高等教育研究 2007, 13: 150-151

ISSUE DATE:

2007-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54203>

RIGHT:

挨拶

尾 池 和 夫（京都大学総長）

（尾池） 第13回大学教育研究フォーラムにたくさんのかたにお越しいただき本当にありがとうございました。これは京都大学高等教育研究開発推進センターが主催して行っているものであります。これから特別講演を寺崎昌男先生にやっていただいて、シンポジウムを進めていただくというスケジュールでございます。

最近のことをお話ししておきたいと思います。今日の5時から内閣府では、経済財政諮問会議の平成19年度第6回が開かれます。平成19年度予算をどうしていくかの基本路線が決まっていくわけですが、2月27日に行われた第4回経済財政諮問会議で、大臣を除く委員が連名で大変重大な文書を提出しているのを、皆さんがたは多分ご存じだと思います。

前の5行を読ませていただきます。これは経済全体の話です。今年のテーマは「生産性加速プログラムに向けて」という非常に激しいものとなっています。「成長力を強化するには、大学・大学院の改革が極めて重要である」。世界じゅうの大学がダイナミックに連携・再編に取り組む中で、この文章は別に異論はないと思います。その次が問題です。「日本の大学は、世界の潮流から大きく後れている」。どうしてこんなことが言えるのだろうと思います。「大講座制、受験競争、学閥等に象徴される」という何十年か前に聞いた言葉もあります。「大学の戦後レジームを今こそ根絶させ、国際競争力の高い知の拠点づくりを行わねばならない」から始まって、幾つかのことが挙げてあります。まず、イノベーションの拠点として研究予算と選択の集中を行う。オープンな教育システムの拠点として大学院のグローバル化プランを策定する。そして、大学の努力と成果に応じた国立大学運営費交付金の配分ルールを作るということです。

今日は第6回の議論が行われるわけですが、その直後に記者会見があります。皆さん、どういう議論が行われたかに注目してください。このシンポジウムの議論の成果を反映して、物を言うところには言うことをぜひ考えていただければと思います。

国立大、私立大、公立大などと言っている世の中ではないと思うわけですが、国立大学はご承知のようにいよいよ19年度に評価の大枠がほとんど決まります。20年度に行われる評価をもとにして、22年からの第2期の目標期間の内容、その予算が査定される時期になっております。19年度に行われることで第2期予算が決まるのですから、皆さん大変緊張しているわけです。私立大学の助成金も一体どう配分されていくのか。非常に切迫した時期になっているわけです。大学が力を合わせて日本の高等教育を守っていくのが、今いちばん大事なことであらうと思います。

一つ、最近の私の経験を申し上げます。サウジアラビアのキング・ファハド大学という石油資源に関係する、王様がお金を出して運営する中軸的な大学があります。そこの顧問会議がありまして、私はアドバイザリーボードのメンバーに招かれて参加しています。そのメンバーは、アメリカ合衆国から5人、イギリスから1人、フランスから1人、アジアからはシンガポール大学の学長さんが1人と日本から私が1人。あとのサウジアラビアのかたが4人。こちらの方でインターナショナル・アドバイザリーボードを作って、大学の運営、将来のことを考える会議をこれから年2回やる。こういうことで招待されたのです。せっかくアジアから2人呼んだのに、そのうちの1人の日本の大学が、大幅に立ち後れていると国で言われていると知ったら、がく然とするのではないかと思います。

外国から見れば、日本の大学は非常に進んでいる大学であり、そういうところからアドバイスをしてくれと呼んでくださるのは非常にうれしいことです。行ってみて何よりもびっくりしたのが、まず教職員、学生全員が男であるということでした。「京都大学はいかに後れているといっても、男女共同参画、教員が6.8%もいるよ」と威張ってきました。

もっとびっくりするのは予算です。「大学を運営するための予算は、どう出てくるのですか」と言ったら、「ああ、それは必要なだけ国王がくれる」という話です。「あなたたちは、そのお金をいかに有効にこの大学の発展のために使えばいいかということを議論してほしい」という夢のような話でした。ふだん言いたいことを我慢している私は、

ここぞとばかり基礎研究と応用研究のバランスが必要だなど、いろいろなことを言ってきました。皆さん一生懸命メモをして、「なるほど、そのとおりだ」と言っていました。私の理想はアラビアで実現するかもしれません。

高等教育というのはそういうものでありまして、とにかくお金だ何だということは言わずに、目いっぱい必要な予算を投入して国の将来のためにやっていくのだという信念がなければ、私は国の将来は暗いと思います。これが大学だと思っています。そんな夢のような話も交えて、理想論も遠慮せずに、現実の非常に暗い近い未来の経済財政諮問会議にもものを言うつもりで、ぜひ今日の議論をしていただければと思うわけでございます。

私は後を聞けなくて大変残念なのですが、寺崎先生にバトンタッチして立ち去ることにいたします。今日は5時までゆっくり、しっかり議論をしていただきたいと思います。今日はたくさんのご参加をありがとうございました（拍手）。

（大塚） 尾池先生はご専門が地震学でありまして、今日は能登の地震の話が出るかと思いましたが。この建物は伝統的な百周年記念館という名前がついておりますが、耐震構造は、尾池総長の折り紙つきでありますから、少々大きい地震があっても皆さんご安心ください。

最初に、特別講演といたしまして、立教学院本部調査役の寺崎昌男先生に「求められる大学教育観の転換—学士課程教育・大学院教育・資格教育—」というご講演をお願いいたします。

寺崎先生は、大学史研究、大学教育史研究の第一人者であります。大学改革の流れの中で、まさに大学改革の実践家として、大学院重点化を東大におられたところに経験をされ、立教大に移られて、教養教育の改革なども実践されて、大学教育改革のリーダーとしてずっと我々を引っ張ってくださっています。現在、我々スタッフもメンバーに属している大学教育学会の会長をされております。そういったご経験、あるいは大学史といった観点からご講演いただきまして、今は大学に関しては目まぐるしく急激に変わっている時代でもありますので、そういった中でどういった大学教育観が必要になってくるのか、その辺のところを探っていければと思います。